

研修報告書 No.18

所 属： 国立国際医療センター

研修先： 嶺北中央病院

高知県での地域医療研修として、本山町立国保嶺北中央病院にて約 1 か月間研修を行いました。私は東京の病院に在籍しており、都市部と比較して地域医療がどのように提供されているのかを実際に体験することが重要だと考えていました。本研修を通じて、地域医療の現状および課題、そしてそこに関わる医療者の皆様の想いを間近に感じることができました。

嶺北地域は山間部に位置し、独居高齢者や老老介護など、社会的背景に起因する医療需要が大きい地域です。訪問診療では、病状だけでなく生活全体を支える視点が不可欠であることを学びました。患者さんの生活空間に足を踏み入れることで、病院内では見えなかった課題が鮮明になり、医療が生活基盤と密接に結びついていることを改めて実感しました。

また、患者さん自身が主体的に気をつけながら生活を維持している様子から、医療者が一方的にケアを提供するのではなく、患者さんとともに病気に向き合う姿勢の重要性も学びました。

診療体制としては、必要に応じて高次医療機関へ搬送を行いながらも、地域の中でできる限り診断・治療・フォローを完結させる努力が続けられていました。限られた医療資源の中で、優先順位をつけながら診療方針を判断する姿勢は、臨床医としての意思決定能力を磨く上でも非常に有益な経験となりました。

また、内科、外科、整形外科、泌尿器科、産婦人科、皮膚科、脳神経外科など多領域の外来診療を見学し、地域における症例の幅広さや複雑性を理解できました。高齢化が進む地域特性から、複数の慢性疾患を抱える患者さんが多いことに気づきました。この経験は、臓器別診療が中心となりがちな都市部では得難い視点であり、全身を包括的に診る総合診療能力が不可欠であることを実感しました。

加えて、日本最小規模の自治体である大川村の診療所にも出張しました。救急搬送に時間がかかる地域だからこそ、診療所に求められる役割は非常に大きく、予防医療から慢性疾患管理まで、地域住民の健康を多面的に支えている姿が印象的でした。

また、医療者が地域住民から深い信頼を寄せられている様子を目の当たりにし、医療は単なるサービスではなく、信頼関係を前提に成り立つものであると改めて感じました。

さらに、デイサービス施設を見学し、多職種が連携して患者さんの生活を支えている様子を学びました。医療・介護・福祉が互いに協力し合うことで、患者さんが自宅で安心して暮らし続けられる体制が整っていました。多職種連携は医療を補う手段ではなく、生活を支える基盤として地域に根づいているのだと強く実感しました。

研修期間には、自然豊かな四国の環境にも触れる機会に恵まれました。ウルトラマラソンや山岳登山を通して、地域に住む方々が誇りを持つ文化や風土を体感することができました。こうした体験は、地域で生きる方々の価値観への理解を深める上でも有意義であり、地域を知ることは住民を知ることにつながるという視点を得られたことも、大変貴重な経験であったと感じています。

本研修を通じて、地域医療は患者さんの生活に最も近い場所で医療を提供する責任とやりがいに満ちた仕事であると強く感じました。今後は都市部で診療を行う中でも、この経験を基盤として生活者の視点を大切にし、病気を診るだけでなく、その人を診ることを常に意識して医療に携わっていきたいと考えています。また、地域包括ケアや慢性疾患管理、予防医療の推進などに貢献できる医師を目指して精進していきます。

最後になりますが、丁寧にご指導いただきました病院の先生がたをはじめ、多くの医療スタッフの皆様、そして本研修を支えてくださった高知医療再生機構の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。